NPO法人
女性と子どものエンパワメント関西
NEWS LETTER
2013. 11. 25 Vol. 41

田上時子のエッセイ

タイで故・松井やよりを偲ぶ

この夏、ＪＩＣＡ（独立行政法人　国際協力機構）の要請を受けて、タイに２週間滞在した。

ＪＩＣＡは開発途上国の経済開発や福祉の向上の寄与が主たる目的で、技術協力などを担っている独立行政法人であるが、今回の私の役割は、「人身取引被害者支援・自立支援促進プロジェクト」の短期専門家として、人身取引被害者の保護・支援のために関わる「多分野協働チーム（警察、シェルター関係者、福祉課職員など）」メンバーに「ジェンダー研修」を行うことであった。具体的にはジェンダー研修をワークショップ形式で行う、研修内容を事前に立案、現地ファシリテーターを育成する、研修も同行して現地ファシリテーターを支援すると広範囲に亘った。２日間の研修をタイ３か所（パラオ、バンコク、チェンライ）で行い、合間に施設見学、各担当との打ち合わせ、移動日とスケジュールも強行で体力との闘いだったが、同時に気力との闘いでもあった。人身売買で保護され家にも戻れず長期シェルターに収容された女の子たちの表情には胸がつまった。

矛盾や葛藤を感じたとき、脳裏をよぎったのが故・松井やよりさんだ。松井さんはジャーナリストとしてフェミニスト活動家として多岐に亘る活動の中で著書も多いが、アジアの女性を日本人に紹介した功績は他の人に例を見ない。残念ながら、２００２年１０月、渡航先のアフガニスタンにて身体の不調を感じ急遽帰国。肝臓ガンの末期と診断され、２カ月半の闘病後に死去。６８歳だった。ガンを告知され永眠するまでに何としても自伝を完成させたいと『愛と怒り　闘う勇気』（岩波書店）を執筆された。ペンを持たなかったのは最後の４日間だけだという。その著書に次のように書かれている。

「ＯＤＡ（政府開発援助）に関して、日本は金額的に世界１，２位を争う援助国で、巨額のお金を使っている。しかし、それがかえって貧しい人たちをさらに貧しくし、女性の地位をより低くする結果になっている。女性のマイナスにならないＯＤＡにするためにヨーロッパの女性たちがガイドラインを作るように各国に勧告を出してきた。先進国の中でも、援助の額が世界一の日本はいつまでたってもガイドラインを作らず最後になった。ＪＩＣＡなど援助機関も男性が中心で、女性がなかなか発言できなかった。ひところはジェンダーに対する理解もないまま援助行政をやっていたが、開発にはジェンダーの視点、女性の視点を意識して入れていかないといけないと思う。」

松井さんとの出会いはカナダから一時帰国した２０代に遡る。颯爽たる風姿は以来いつも変わらなかった。

松井さんはクリスチャンだった。天に召された松井やよりの姿は見えないが、彼女の想いは著書に残っている。今また改めて読み返している。